

2016 熊本地震被災地の障害者を救おう！

熊本地震大阪障害者支援ニュース vol.4

2016年6月13日(月) 2016 熊本地震大阪障害者緊急対策連絡会本部 (TEL06-6697-9005)

熊本地震・震災支援に大阪から現地入りしたひびき福祉会谷崎さん(5月15日～21日)、ふたかみ福祉会竹田さん(5月22日～28日)から、現地状況に関するレポートが届きましたので、その一部を紹介します。

○益城町での訪問活動(谷崎さん)

5月16日から20日まで、JDF熊本支援センターから車で益城町に通いました。訪問した主な地区、件数などは以下のとおりです。

	地区	訪問	対話	不在(※)
1日目	惣領	14	6	8(3)
2日目	惣領	21	13	8(3)
3日目	惣領、安永	15	7	8(4)
4日目	安永、古閑	12	5	7(1)
5日目	広崎、下陳、寺迫	14	7	7(3)

(※)は不在のうち、近隣の住民から聴取した件数

①被害の状況は、人それぞれ・・・

益城町は、家屋倒壊の被害が最も大きかった地域です。地震から1ヶ月が経った今も、屋根瓦やブロック塀のガレキが庭先に散乱したまま、ライフラインも寸断されたまま、という訪問地区もありました。

隣近所でありながら、被害に大きな差があることにも驚きました。「自分の家は無事だったが、すぐ近くの家々は損壊。気が引けて、地震のことは近所では話せない」と語っていた60代男性。また、同じ集合住宅でも、水道管の破損状態によって、水道が使えない棟だけ住民全員が避難し、閑散としていました。

訪ねた人が不在でも、近所の人から情報を得られる場合もありました(前述の表参照)。3日目の訪問先では、近所の人から「数日前、家の片付けでお母さんが一時的に帰って来ていた。精神障害のある娘さんがいて、すごく大変だと言っていたよ」と教えてくれました。しかし、現在の居場所や連絡先が分からず、気になりながらも、次の訪問先に向かうしかありませんでした。

②避難所生活と屋外避難

自宅が被災し、いったんは避難所に行ったものの、一晩から数日で自宅に戻り、敷地内のテントやガレージ、車の中で寝泊まりしている人もたくさんいました。避難所を出た理由は、「避難所は洋式トイレやベッドがない」「オムツ交換で匂いがするので、周りに気をつかう」「人が多くて落ち着かず、パニックになった」「多動で大声をあげるの、周りに迷惑をかける」等々。

発達障害児のお母さん達は、「避難所で大人がケンカするのを見て、すっかり怯えてしまった」「屋根のある場所を怖がって、テントでしか寝泊まりできない」と話してくれました。

重度知的障害のある25歳女性は、母と姉の話では、二度の地震を体験した恐怖で体を動かせなくなり、トイレにも行けなくなり、オムツ内失禁になってしまったとのこと。また、オムツの入手にも大変苦労したとのことでした。

なお、テント村については、5月末での閉鎖が決まっらしく、「急に言われても、次に行く所がない。どうすればいいのかわからない」「まだ支援を縮小する時期ではない。町役場に電話で抗議した」という声を複数聞きました。

③危険な住宅での生活

4日目、河川沿いに建つ家に住む30代男性(発達障害)と、その両親を訪ねました。地滑りのため河川に向かって家が傾き、雨が降ると避難勧告が出るとのこと。家屋判定は【赤】(立ち入り危険)ではなく、【黄】(立ち入り要注意)ですが、いつ河川に崩れ落ちてもおかしくない状況。避難所には行ったものの、不眠が続いた男性の強い希望により、危険を承知で帰宅。両親は庭で車中泊を続けていますが、男性は「自分の部屋でないと眠れない」と、自宅内で寝泊まり。両親がいくら危ないと言っても、聞き入れてくれないとのことでした。

一方、家屋判定が【緑】(危険を認めず)の家でも、地盤沈下により家全体が少しずつ沈む、内壁に新たな亀裂が走る、周辺の地形が刻々と変わるという話を聞きました。外から見ただけでは分からないことで、安心できる生活には、ほど遠い状況でした。

④行政に対する声

訪問活動のなかで最も多く聞かれたのは、行政の情報や支援が届いていないことへの不安の声です。

訪問時、私たちは必ず、身分証の提示とともに、「益城

町役場の依頼で来た」ことを名乗ります。そうすると、ほとんどの場合、「やっと町の職員が来た。情報が得られる」と喜ばれ、「役場の窓口はいつから再開するのか」「ライフラインの復旧、ガレキの撤去、ゴミ収集はいつになるのか」「罹災証明や医療費減免の手続きは、どこでできるのか」等、多くの質問を受けました。

私たちが避難所で入手してきた『広報まじき災害臨時号』のチラシを見て初めて、役場機能や連絡先が移転していることを知ってショックを受ける人もいました。地震でテレビが映らなくなった、町内放送が聞こえない、介助なしで家から出られない等の理由で、必要な情報を得られずに孤立し、不安を抱えながら在宅生活を続けている実態が見えてきました。

また、もともと地域の社会資源が乏しく、地震前から生活が大変だったうえに今回の地震がおき、さらに大変な生活を強いられていることを訴える人も、1人や2人ではありませんでした。

にしはらたんぽぽハウス（竹田さん）

○5月24日（3日目）

にしはらたんぽぽハウスにて日中支援

たんぽぽハウスも黄色の紙が貼られており、斜面側はブルーシートで覆われており、崩れる恐れがあるとのこと。スタッフマネージャーの赤松氏、大野氏も朝は同行し、たんぽぽハウスの上村所長、久保田職員に現状の聞き取り。

午前中は山鹿温泉へ利用者と共に同行し、入浴支援、食事のサポートを行う。

西原村の野菜などを使っており、その恩返しとして、たんぽぽハウスや、避難されている方を対象に、お風呂と昼食の提供を行ったとのことであった。

午後からは利用者と共にしおり作りの作業をともに行う。作業の状況や機材の状況など職員から説明を受けた。

○5月26日（5日目）

にしはらたんぽぽハウスにて日中支援。

午前、午後共にドレッシング作り作業を利用者と共に行う。

利用者も全員が通えておらず、作業は始めることができたが、作業の担い手が不足している。ボランティアが入ることでその点を補っている様子であった。

ボランティアは、炊き出しと日中支援と入っており、長期で継続して日中支援に入っておられる方もいた。

夕方に福祉避難所である構造改善センターへ視察を行う。避難生活をしておられる方3名から聞き取りを行った。おかげさまで不自由はしていないが、早く家に帰りたい

とも話されていた。看護師が常駐しておりその点は助かっているとのこと。たんぽぽハウスでも、毎日赤十字の方が巡回で来られていた。

○まとめ

初めての大きな震災時の支援であったが、1日目の視察で崩壊した建物や紙の貼ってある建物、避難所を見ると、震災の恐ろしさを実感した。特に益城町と西原村は衝撃であった。

にしはらたんぽぽハウスの支援では、職員さんたちは被災したとは思えない立ち振る舞いの中にも、表情には疲れも見え、日中あくびが多いなど、よく眠れていないのではないかと思うような様子も見えた。又、日常的な掃除や片付けができてないようであり、時間を取って行う必要性を感じた。

支援物資に関しても、日中活動が平常に戻っていくにつれどう活用していくかが課題となってくると思われる。

仮設住宅が近隣で建設が始まっていたが、バリアフリー対応ではなく、地域的にも高齢の方が多い地域となっており、バリアフリーの仮設住宅のニーズが多い。

西原村でにしはらたんぽぽハウスの存在はしっかりと認知されており、ボランティアの方もたくさん来られている。困っている人がいると手を差し伸べずにはいられないといった感じの支援をされていると感じた。

日中の作業が可能な範囲で始まったことで、生活にメリハリができて始めた。自分の事業と比較すると戸惑う点もあったが、外からボランティアが入ることで学ぶ面もあったのではないと思う。

※JDF 人員派遣は、日曜日現地入り（オリエンテーション）、月曜支援活動開始～土曜日、終了（帰阪）というスケジュールで行われています。訪問活動（10人）と現場支援（2人）を基本にして体制が組めるように、呼びかけられています。

現在6月中の体制は確定しており、7月①3日～9日、②10日～16日、③17日～23日、④24日～30日という期間を重点的に募集しています（大阪から各期間、2名以上）のでご検討下さい。詳細は、大阪連絡会（担当：雨田）までお願いします。

